

第6次茨木市総合計画(抜粋)

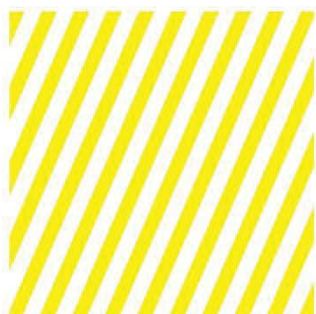
②次なる茨木へ。

第5次茨木市総合計画における取組の一つとして、市の魅力発信を進めてきました。その中で、まちに関わる人たちが、どのような姿をめざしてまちづくりを推進していくのかをイメージし、多くの共感を呼ぶための合言葉として、「次なる茨木へ。」というブランドメッセージを作成しました。

市民ワークショップや市民等による投票を経て決定した、この「次なる茨木へ。」は、次々と変わり続けるまちへの期待感や、本市に関係する方々の活動意欲を喚起したものとなっています。

なお、市民アンケートにおける「市の良いところを市内外に向けて発信できているか」の質問では、5年前と比べて肯定的な意見の割合が一定上昇しており、今後ともブランドメッセージを活用して、さらなる市の魅力発信を広げていきます。

次なる 茨木へ。



茨木には、次がある。

茨木には、次がある。

大阪市・京都市に次ぐ街。

自然と都市が次いでいる街。

次世代を育む学生が多い街。

次々とひろがる、はてしない未来。

黄色い斜めのストライプ。

その角度は、地球の「地軸」と同じ23.4度。

地軸の傾きは日本に四季をもたらし、

次々と、この街を未来へいざなっている。

次なる茨木は、どうなるだろう。

次なる茨木は、何をするだろう。

次なる茨木へ。

茨木市の新しいメッセージです。



③おにクルの取組

次なる茨木の最優先の取組として、文化・子育て複合施設の整備を進めてきました。「100人会議^{※1}」など、市民の皆さまとの対話から、市民と行政がともに作り上げる「育てる広場」というキーコンセプトが生まれました。

社会実験IBALAB^{※2}では、活動者とともに「つくる・つかう」のルールづくりを実践するなど、おにクルの整備・開館に向けて、市民参加の取組を多数開催してきました。

ワークショップの回数は108回、参加者の延べ人数は2,217人と、整備に関わった市民の人数は日本一と自負できるほど、多くの市民の皆さまとともに進めてきました。その進め方は単に施設を建てるだけの手法ではなく、これからの茨木のまちづくりの進め方の象徴でもあると言えます。

④市民・事業者・大学等と連携した取組

中心市街地のまちづくりとして、様々な社会実験やワークショップなどを通じて、多様な主体が出会い、活動が生まれる「場＝中間領域」を創出させる「イバラキクラウド^{※3}」の取組を進めてきました。

また、山とまちをつなぐハブ拠点として期待される「ダムパークいばきた」の整備においても「安威川ダムファンづくり会」を立ち上げ、地域の方々をはじめ、様々な分野の方々と議論を重ねるなど、ともに取組を進めてきました。

さらに、事業者や大学などの多様な主体との連携を行い、市民サービスの向上に向けて、ともに新たな価値を創造していく取組を図ってきました。

各地域においても、地域の課題の洗い出し・共有を行うとともに、その解決方策を検討するためのワークショップを実施するなど、市民参加型で課題解決に取り組んできました。



IBALAB@広場「ひろばかいぎ」



道路空間や駅前での社会実験

※1 100人会議

市民会館の跡地エリアの活用方法について、様々な属性の市民10名と市長による対話を計10回開催した会議です。会議の中での対話から出たキーワードを集約、分析し、市民会館跡地エリア活用における基本構想の策定の基礎となったものです。

※2 社会実験 IBALAB

市民会館跡地エリアのキーコンセプトである「育てる広場」のプロセスの一つとして、“みんなで”どんな過ごし方、使い方ができるかを考え、実際に芝生広場を作り、様々な形で市民自身が使ってみることで、市民のアイデアから多くの企画が生まれた社会実験です。

※3 イバラキクラウド

ワークショップや社会実験などの活動のプロセスを通して、多様な主体に関わり、出合いや活動の場を創出することで、人と活動をつなぐネットワークを生み出し、広げていく取組です。

計画策定の背景

(5)まとめ

総合計画の策定にあたって、「茨木の魅力」「取り巻く環境と課題」「市民の想い」「第5次総合計画期間のまちづくり」を整理してきました。

(1) 茨木の魅力

- ・身近に広がる豊かな自然
- ・充実した交通環境
- ・盛んな市民活動
- ・多様な都市機能
- ・まちに息づく歴史・文化
- ・豊富な学術研究機関
- ・子育て・教育環境の充実

(2) 取り巻く環境と課題

- ・人口減少・少子高齢化
- ・自然災害の増加と感染症の流行
- ・環境問題への対応
- ・ライフスタイルや価値観の多様化
- ・デジタル化の進展
- ・持続可能な行財政運営

(3) 市民の想い

市民アンケートの結果や、アンケートを踏まえて実施した市民ワークショップでは、「地域のつながりや世代間交流の希薄化」を不安視する声や、住みたいまちの姿として「一人も見捨てないまち」「地域ぐるみでこどもの成長を感じるまち」「幸せでつながるまち」など、「つながり」を求める声が多く見られた。

(4) 第5次総合計画期間のまちづくり

- ・着実な取組、盛んな市民活動・地域活動をいかした取組の推進
- ・次なる茨木へ。
- ・おにクルの取組
- ・市民・事業者・大学等と連携した取組

市民をはじめとした多様な主体が活躍しているなどの「茨木の魅力」、ライフスタイルや価値観の多様化などの「取り巻く環境と課題」、さらには「市民の想い」や「第5次総合計画期間のまちづくり」を踏まえると、多様な主体によるプロセス重視・ひと重視の

共創のまちづくりの環境が醸成されています。

「次なる茨木」における「共創」のまちづくり

「共創」とは、多様な主体の活動が掛け合わされることで、新たなモノやコトが相乗効果により生み出される取組です。本市では、多様な人たちが出会い、集い、活動が生まれることにより、誰もが安全安心、豊かさ幸せを実感できる「共創」のまちづくりを進めます。

(1) 活動人口が増えるまち

地域での福祉や防災、まちなかでの賑わい活動など、本市は市民活動が盛んなまちです。人口減少の局面を迎えたとしても、まちのそこかしこで多様な活動が展開され、活動する人(活動人口)が増えることによって、まちの活力は維持・増大していきます。

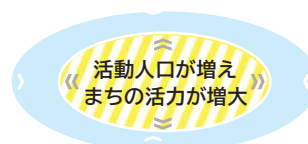
人口減少に加え、ライフスタイルや価値観の多様化など、大きな変化が進むこれからの時代においても、まちが持続的に発展する「次なる茨木」を実現するために、新たな活動による活動者の増加に資する「共創」の取組を進めます。

活動人口の維持・増加



少子高齢化の進展に伴って、全人口は少しずつ減少に転じる

〈10年後〉



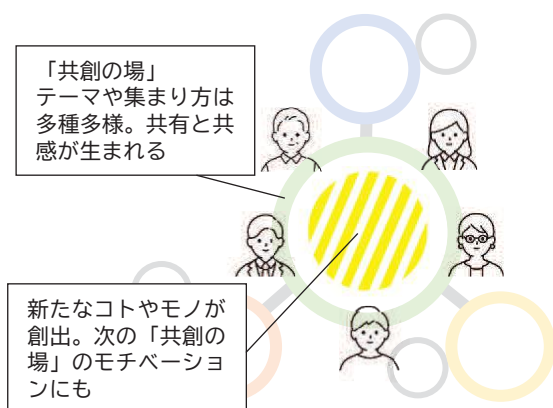
全人口は減少しても、「共創」が広がり活動人口が増えることでまちの活力は維持・増大

(2) 新たな活動が景色となるまち

「共創の中心地」であり「実験場」でもある「おにクル」では、「楽しい」「やってみたい」がモチベーションとなり、「試してみる」からでも始めることができる「新たな活動」が生まれています。また、市民、大学、民間事業者など多様な主体が出会いつながる「共創の場」として、日々多彩な活動が展開されています。

新たな活動は、これまで地域で培われてきた様々な活動とも結びつくことで、それらの活動の幅を広げるとともに、活動する人には自己実現を、活動を見る人や参加する人には新たな出会いをもたらし、まちに関わる人である活動人口を増加させます。

これからは「共創の場」が市内各地に展開され、そこで生まれる新たな活動がまちの景色となるよう取組を推進していきます。



「共創の場」で多様な主体や活動がつながり、新たなコトやモノが創出される

〈10年後〉

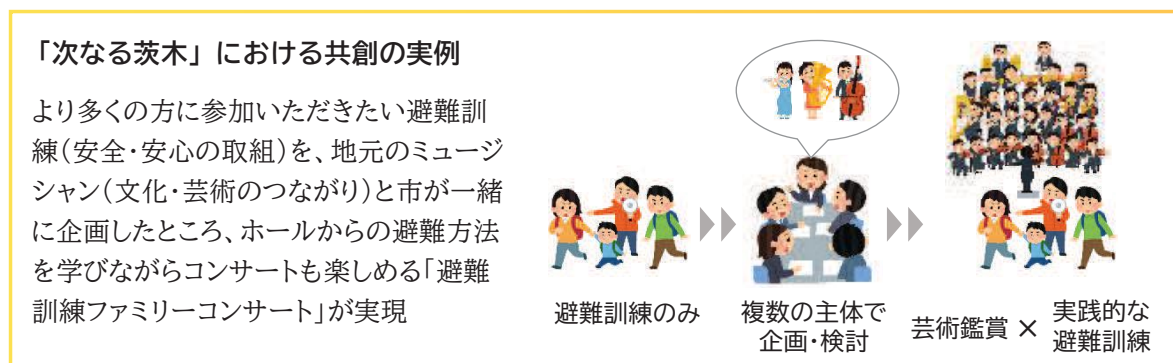


共創の取組の推進により、各地で「共創の場」が生まれ、関わる人や人同士のつながりが増える

(3)共創のまちづくりによる諸施策の推進

新たな活動を生む「共創」の取組により、共通のテーマに対して、各主体の専門性やつながりが掛け算され、多様なアプローチが試みられることで、相乗効果が生み出されます。

例えば以下のように、ある取組・テーマに対して、多様な分野・主体が気軽にアイデアを出し合えるような景色をまちに定着させていくことで、その取組がより効果的に持続してだけでなく、次の新たな活動を生み出す呼び水にもなっていきます。



このような考えから、本市のまちづくりでは、あらゆる分野・施策において、「共創」の取組を推進することで、誰もが安全・安心、豊かさ・幸せを実感できる「次なる茨木」をさらにカタチにしていきます。

「次なる茨木」における「共創」のポイント

豊かさ・幸せ

共創のまちづくりは、多様な主体が掛け合わされることで、ひとりでは思いつかなかった新しいモノやコトが生まれたり、関わりやつながりを通じて豊かさや幸せが向上したりするといった「アウトカム志向」※1の取組です。

きっかけと自己実現

「楽しい」「興味がある」といった個人的で気軽なきっかけでも、失敗するかもしれないと踏み出せなかったチャレンジでも大丈夫。「みんなの前で歌いたい！」がきっかけで始めた活動が、いつしかイベントで歌のお姉さん、お兄さんとして子どもたちと歌って踊るように…そんな自己実現も「共創のまちづくり」。企業なら「ビジョン・ミッション」、大学なら「学び」も活動をはじめるきっかけです。

「共有」と「共感」

でも、みんながやりたいことをやっているだけでは、共創にはなりません。ポイントは「共有」と「共感」。プロセスを共有し、時間や場所がシェアされる中で、お互いの価値観に対する共感が生まれます。多様な価値観との出会い、新たな人とのつながりは、ひとと暮らしを彩って次のモノやコトへのきっかけとなり、さらなる共創のまちづくりを推進します。

※1 アウトカム志向

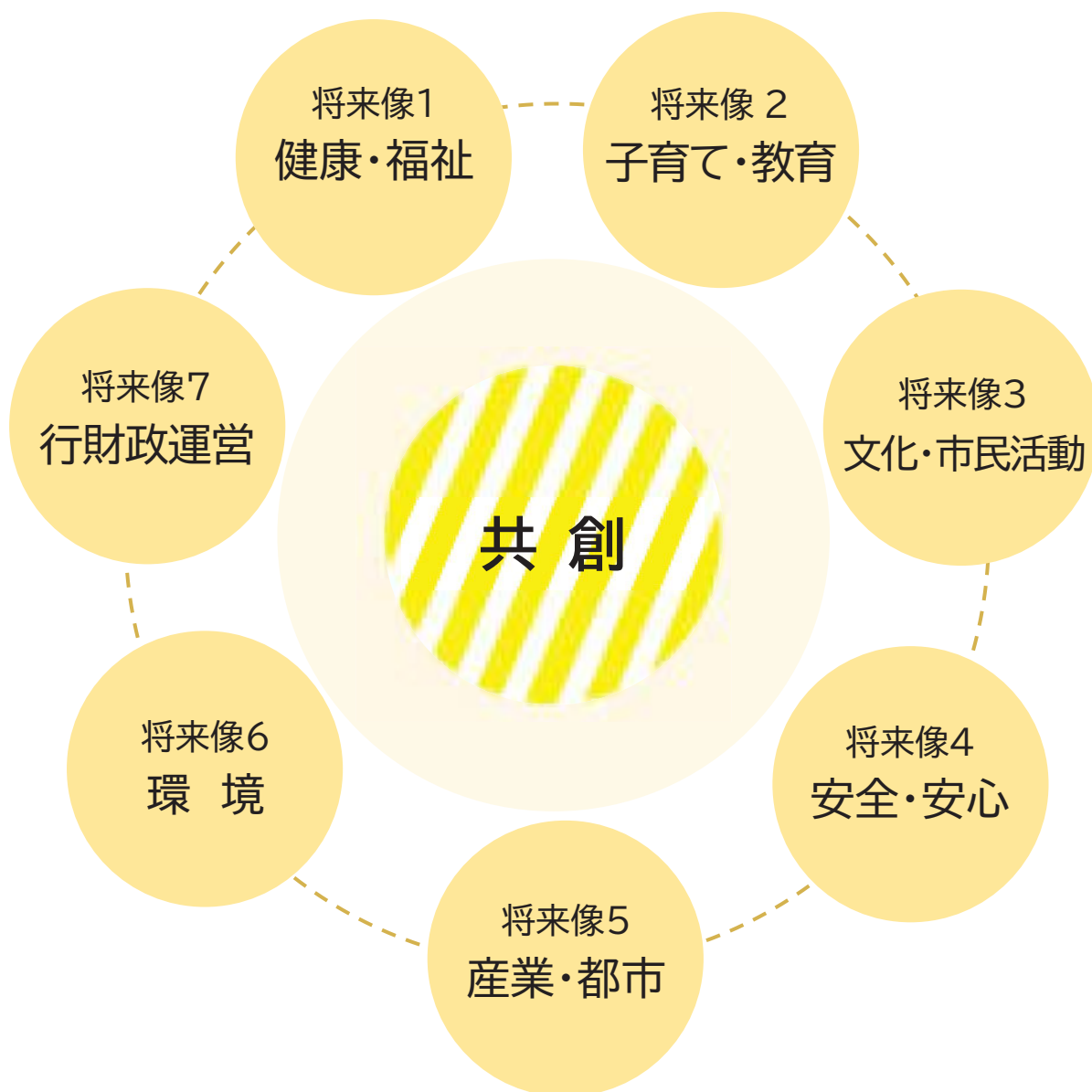
目標や評価値を設定する際に、数値や結果を指標とするアウトプットに対し、「効果」や「影響」に着目する考え方です。

まちの将来像

計画策定にあたって整理した魅力やこれまでのまちづくりを踏まえ、共創のまちづくりを進め、みんなが多彩な幸せを実感できる持続可能なまちをめざすため、次に掲げる7つの分野において茨木市がめざす将来像を設定することとします。

また、各分野における将来像は一つではなく、複数設定しており、多様な価値観のもと、多様な主体が活躍できるまちづくりをめざします。

なお、全ての将来像がその分野の中で完結するのではなく、全ての将来像が有機的につながり、横断的・複合的な視点を持つことで、各将来像が示すまちの姿をめざすこととします。



まちの将来像

(1) 健康・福祉

・つながりを大切に、ともに支え合えるまち

地域交流を促進(市民同士のつながりを強化)し、相談体制を整備(市民、関係団体・機関、行政のつながりを強化)することで、ともに支え合えるまちをめざします。

・いきいきと日常を過ごせるまち

年齢や属性等に関わらず、誰もがやりたいことができるよう、社会参加に壁を感じている人(=自分のやりたいことができていない人)も、自分が社会から取り残されているのではなく、社会の一員であるという感覚を持つことができ、いきいきと日常を過ごすことができるまちをめざします。

・いつまでもすこやかに安心して暮らせるまち

市民一人ひとりが健康への関心と理解を深め、健康づくりに主体的に取り組むことにより、すこやかで心豊かに暮らせるまちをめざすとともに、地域医療の充実、介護者負担の軽減、社会保障の適正な運用と担い手の確保等により、もしものときでも安心して暮らせるまちをめざします。

市民の声

- ・人々が助け合い、声を掛け合えるような、つながりを大切にするまち、笑顔があふれるようなまちで暮らしたい(50代女性)
- ・一人暮らしになっても買い物や病院などで不便と感じないまちで暮らしたい(60代女性)
- ・高齢者や障害者も社会参加できるまちで暮らしたい(40代女性)
- ・無職、孤立者、貧困者の居場所がないことが不安・不満(50代男性)
- ・病気になっても安心して生活できるまちで暮らしたい(70代男性)
- ・病気になっても、こどもに負担をかけずに、行政のサポートが受けられるまちで暮らしたい、自分の介護のために、こどもの人生設計を変更させたくない(60代女性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

まちの将来像

(2) 子育て・教育

・こども・保護者の「うれしい」を育むまち

全てのこどもの個性を尊重し、全ての子育て家庭に切れ目なく支援を行うことで、こどもも保護者もたくさんの「うれしい」を育めるまちをめざします。

・地域ぐるみでこどもの成長を感じるまち

地域全体で子育てを支援し、保護者を孤立させることなく、子育てでつながる地域社会となることで、こどもが成長し、いきいきと地域で暮らすことができるまちをめざします。

・こどもの「好き！」を伸ばせるまち

こどもたちの個性、障害の有無、育つ家庭環境などに関わらず、一人ひとりが安心できる居場所があり、学びの中でこども一人ひとりの「好き！」を伸ばせる体験をとおして、全てのこどもが自分らしく輝き、喜びとともに成長していくことができるまちをめざします。

市民の声

- ・保育イベント、親子教室などは平日午前中ばかりで、働く親は参加できない(30代女性)
- ・子育て中の親が孤独にならないようにしてほしい(30代男性)
- ・周りとの協力しながら子育てできるまち(10代女性)
- ・こども達の成長を地域で見守り支えるまち。校区の垣根などを越えて、こども達がつながり、学べる環境であってほしい(30代女性)
- ・多様性が尊重されるまち。特にこどもの教育については個性や多様性が尊重されるものであってほしい(50代女性)
- ・こども達がもっと自由に楽しく生活できる学校などの為に、個性や個人を尊重する為の教育を徹底してほしい(30代男性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

まちの将来像

(3) 文化・市民活動

・いくつになっても学べるまち

勉強だけに限らず、文化芸術等の趣味活動や、興味を持った分野の課題について、何歳であっても誰もが自ら知り、学ぶことができ、その学びにより豊かな人生を送ることができるまちをめざします。

・プレーヤーもサポーターもスポーツで幸せを感じられるまち

運動やスポーツを楽しめる環境が充実し、プレーするだけでなく、観戦を楽しみスポーツを身近に感じるなど、様々な関わり方により、スポーツを通じて幸せで健康に暮らすことができるまちをめざします。

・継続的に文化に触れ、創り、育むまち

日常生活の中で継続的に文化芸術に触れられる環境づくりを行い、新しい価値を創造することができるとともに、これまで継承されてきた歴史・文化資源にも触れ、受け継ぐことで心豊かな生活ができるまちをめざします。

・お互いを認め合い、つながり、活動できるまち

地域の多様な主体が出会い活動する場を創出し、地域コミュニティが醸成される環境を育むとともに、年齢・性別・国籍・職業などの社会的属性や価値観や生き方など様々な部分で、お互いの人権を尊重し、違いを理解し認め合うことで、様々な背景を持つ人同士がつながり、活動できるまちをめざします。

市民の声

- ・学習する場所がもっとほしい(30代女性)
- ・高齢になっても学べるシニアカレッジのような場が少ない(70代女性)
- ・みんなでスポーツ観戦できる施設が少ない(50代男性)
- ・いろいろな食、文化、芸術、運動に触れられるまち(30代男性)
- ・スポーツを楽しんだり、芸術に触れられたりする場所が少ない(30代女性)
- ・多様な人々へ自ずと笑顔の広がるまちであってほしい(70代女性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

まちの将来像

(4) 安全・安心

・災害に強い都市基盤を持つまち

安威川ダム・大型物流施設等の地域資源を有効に活用した防災対策が進むとともに、防災拠点の機能充実や広域連携により、災害に強く安心して暮らすことができるまちをめざします。

・安心して上下水道が利用できるまち

地震対策、老朽化対策、浸水対策等を進めることで、自然災害等による被害を最小限にとどめ、被災した場合であっても機能が継続され、安心して上下水道が利用できるまちをめざします。

・地域のつながりが強く、防災・防犯対策が充実しているまち

多様な災害に即応できる消防・救急体制が充実しているとともに、大学や事業者等との連携や、地域のつながりにより、防災・防犯対策、消費者教育が進んでいるまちをめざします。

市民の声

- ・大雨・台風時に川の氾濫が不安(40代男性)
- ・地震などの災害時にトイレが使えるか不安(60代女性)
- ・地域のつながりが希薄で、災害発生時が心配(70代男性)
- ・上下水道管の老朽化が心配 (40代男性)
- ・災害が起こった時に、素早い対応ができるまち(50代女性)
- ・防犯灯や防犯カメラが少ないと感じるので増やしてほしい(40代女性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

まちの将来像

(5) 産業・都市

・個性あふれる茨木らしさで活気あふれるまち

交通利便性等の強みをいかした産業の育成、地元企業や大学との連携によるイノベーションの創出、創業促進、農林業等による地産地消の取組や担い手の育成、市内産業の認知度向上などにより産業が発展するとともに、茨木にある個性をいかした観光の振興を実現し、活気のあるまちをめざします。

・山とまちが調和した、魅力的で過ごしやすく暮らしやすいまち

茨木の特徴である「山」と「まち」の調和がとれた土地利用誘導を図りながら、北部地域や中心市街地の魅力をいかした都市整備等、地域特性に応じた都市づくりを進めるとともに、緑豊かで良好な景観や住環境を形成することで、人々が思い思いの過ごし方ができ、魅力的で暮らしやすいまちをめざします。

・安心・安全・快適に移動できるまち

誰もが安心して安全にまちなかを移動でき、あらゆる交通手段を利用し、利便性が高く円滑な交通環境を実現することで、気軽に外へ出て活動ができるまちをめざします。

市民の声

- ・企業誘致により財政豊かなまち。主要駅近辺が発達し活気のあるまち(40代女性)
- ・経済・文化・学術・観光のバランスが取れた活気のあふれるまち(50代男性)
- ・人と人との交流が望んだ時にできるまち(10代女性)
- ・市内外の人から魅力的に感じるまち(10代女性)
- ・自転車、自動車などの交通マナーが悪く、将来子どもが外を歩く時心配なので歩行者に優しいまち(30代男性)
- ・環境は良いが高齢のため交通が不便に感じる。住んでいる所が田舎で町の中心部に行くのが大変(70歳代男性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

まちの将来像

(6) 環境

- ・一人ひとりの小さな行動が支える、環境に優しいきれいなまち

まちの美化や脱炭素化の推進、環境への負荷を軽減する資源循環等、様々な観点での「きれいなまち」を実現するために、一人ひとりが実際に行動に移しているまちをめざします。

- ・自然を身近に感じて暮らせるまち

北摂山系の豊かな自然が守られ、まちなかに身近な緑があふれることで、多様な動植物と触れあうことができ、癒しや健康の増進などにつながり、快適な暮らしができるまちをめざします。

- ・環境について学び、みんなでつくる環境のまち

地球規模の環境問題から茨木での環境取組についても学ぶことで、茨木市における理想の環境の姿を考えるなど、環境教育が充実し、一人ひとりの意識が高まり、行動に結びついているまちをめざします。

市民の声

- ・環境に優しくて綺麗なまち(10代女性)
- ・自然な場所(川など)でこどもと遊べる場所が少ない(40代男性)
- ・街中に溶け込むような豊かな緑を感じ全ての世代が癒される公園、緑地、自然が少ない(50代女性)
- ・こどもを中心に興味を持てる環境フェアが増えてほしい(40代男性)
- ・環境教育が不徹底に感じる(70代男性)
- ・まち全体を通して捨てられている空き缶やゴミが多く、住んでいて癒されない(40代女性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

まちの将来像

(7) 行財政運営

・デジタルを活用して豊かに暮らせるまち

デジタル技術により、社会・経済・生活等のあらゆる分野をより良い方向に進めるとともに、全ての世代のかたがデジタル化の恩恵を受け、豊かに暮らすことができるまちをめざします。

・まちの情報を受け取り、発信したくなるまち

市民のかたが市政や地域に関する情報を受け取り、まちへの信頼・愛着を高めることで、自らもまちの情報を発信するなど「関わり」を増やしたくなるようなまちをめざします。

・安定した行政サービスが提供される、持続可能なまち

人口減少社会の到来などにより財政状況が厳しい中においても、効率的・効果的な行政運営により健全な財政を維持することで、安定した行政サービスが持続的に提供されるまちをめざします。

市民の声

- ・デジタル化についていけない人たちが、取り残されないまちになってほしい(70代女性)
- ・ICTを活用した教育に熱心なまちになってほしい(30代女性)
- ・行政手続きが便利で簡単になってほしい(30代女性)
- ・他市と比べて茨木市は特徴、個性が見えない(50代男性)
- ・他市民から羨ましいと思われる茨木市になってほしい(50代男性)
- ・他の自治体や国全体より行政サービスが充実しているまち(60代男性)

【市民アンケート・市民ワークショップより】

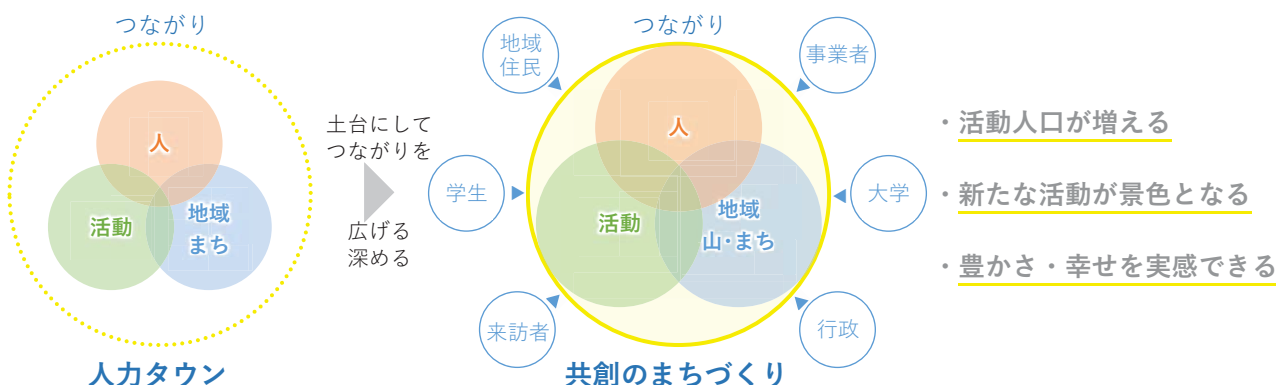
1 市民と共に創るまちの姿

(1) 基本理念 ～“考える”から“共に創る”「共創のまちづくり」～

第3次都市計画マスタープランでは、人・地域活動・まちとの「つながり」をつくることを大切に考え、市民一人一人の力を高め、知恵を集め、「人の力」を最大限に発揮できるようなまちを目指して、“「人持ち」でつながる「人力(じんりき)タウン」茨木”をキャッチフレーズに、13の「市民が考えるまちの姿」を掲げ、市民と共に考え、協働を重視したまちづくりを進めてきました。

この考えを土台として、人・活動・地域(山・まち)のつながりを更に広げ・深めることで、市民と“考える”から“共に創る”「共創のまちづくり」へと発展させ、まちづくりの基本理念として設定します。

また、序章で整理したこれからの都市づくりの視点によるキーワードと関連付けることにより、「市民と共に創るまちの姿(暮らしのイメージ)」として具現化し、この将来ビジョンに沿った都市づくりを目指していきます。



市民が考えるまちの姿 + これからの都市づくりの視点によるキーワード

- | | |
|---|--|
| <p>①人が育ち、人を育てるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域住民と育む ・まちづくり組織 ・担い手の発掘・育成 ・大学生が多い <p>②挨拶があふれるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティ醸成 ・ソーシャル・キャピタル <p>③「人持ちになろう」が合言葉のまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係人口の増加 ・活動人口の増加 <p>④たのしく散歩ができるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウォーカブル ・回遊性向上 <p>⑤夢に向かってチャレンジができるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おにクル ・大学との連携 <p>⑥いろいろなくらしができるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活圏の形成 ・二地域居住 ・デジタル技術の活用 ・カーボンニュートラル ・サードプレイス <p>⑦なりわいを大切にするまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業者との連携 ・地域貢献 ・エリアマネジメント <p>⑧地元で循環するまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・循環経済 | <p>⑨茨木のエエもんを育むまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひと・プロセス重視 ・地域資源の利活用 ・文化芸術のまちづくり ・観光・交流拠点づくり <p>⑩身近な自然を守り、使い、育てるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダムパークいばきた ・みどりのネットワーク ・自然との共生 ・カーボンニュートラル ・生物多様性の保全 ・グリーンインフラ <p>⑪人に優しい交通システムを取り入れるまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通環境の維持 ・MaaS(マース) ・モビリティマネジメント ・シェアモビリティ・シェアライド ・自転車の利活用 ・車中心からひとと中心へ <p>⑫今あるものを工夫して活かすまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会実験 ・公共空間の利活用 ・リノベーション <p>⑬もしもの時の備えができているまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安全・安心 ・地域防災力 ・自助・共助・公助 ・レジリエンス ・事前復興 <p>(共通するキーワード)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウェルビーイング |
|---|--|

具現化

市民と共に創るまちの姿(暮らしのイメージ)

～山とまちが調和した、魅力的で過ごしやすく暮らしやすいまち～

（2）暮らしのイメージ

立地適正化計画では、「本市が目指す暮らしやすさのイメージ」を掲げ、“暮らし続けたい・暮らししてみたいまちの実現に向けて”をキャッチフレーズに都市づくりを進めてきました。

今回の改定では、基本理念を踏まえ、立地適正化計画による暮らしやすさのイメージ（まちなか・まちの暮らし・交通・人）に山の特性を活かした内容（山の暮らし・山とまちをつなぐハブ拠点）を追加し、「暮らしのイメージ」として設定します。



イメージ1 地域内外の人が関わりながら、里地里山の豊かな資源が大切にされている

- ・北部地域では、これまで培ってきた生業や地域のつながりを背景にしながら、里地里山の豊かな資源が、地域内外の人の関わりにより維持され、大切にされています。
- ・また、北部地域の魅力に関心をもつ若者や地域外の人により、新規就農や伝統農業の継業、地域資源を活かした産業や生業づくりなど、新たな活動が生まれています。
- ・さらに、既存ストックや自然、文化資源などの地域資源を活かした新たな魅力づくりを進めることで、地域に関わる人・活動する人が増え、地域の暮らしが維持されています。



キーワード

- 地域資源の利活用
- 自然との共生
- サーキュラーエコノミー
- 生物多様性の保全

イメージ2 山とまちとの往来をきっかけに、さまざまな活動や交流が生まれている

- ・ダムパークいばきたでは、まちで暮らす人や来訪者が、山に訪れる機会が増えることで、地域への関心が高まり、さまざまな活動が行われるなど、山の魅力が広がっています。
- ・山で暮らす人と関わる人が増えることで、新たな活動や交流が生まれ、山とまちのつながりが生まれています。



キーワード

- ダムパークいばきた
- 観光・交流拠点づくり
- 関係人口の増加
- 活動人口の増加
- みどりのネットワーク
- グリーンインフラ
- 二地域居住

イメージ3 茨木らしいまちの楽しみ方や使い方ができ、思い思いに過ごすことができる

- ・おにクルでは、多様な主体が出会い、思い思いの「活動」が日常的に繰り広げられ、活動が「景色」となっています。
- ・そうした活動の景色や賑わいがまちなかにも広がり、公園や沿道、駅前などの公共空間を活用した多様な「場」で、まちなかを楽しみ、使いこなす人が増え、「ひと中心の居心地が良いまちなか」となっています。
- ・このような多様な主体との関わり、活動・体験を共有し、その積み重ねにより共感が生まれ、社会的なつながりによる豊かさや幸せが実感できるまちなかとなっています。



キーワード

- おにクル
- 社会実験
- 公共空間の利活用
- 回遊性向上
- ウェルビーイング
- 車中心からひと中心へ
- サードプレイス
- ウォークアブル

イメージ4 生活に必要なものが身近にあり、日常を豊かで便利に過ごすことができる

- ・居住地域では、歩いて行ける範囲に子育て・教育・医療福祉・商業などの生活利便施設が立地していて、便利で暮らしやすい生活ができます。
- ・また、災害への備えがしっかりしていて、安全・安心に暮らすことができます。
- ・公園などみどりが身近にあり、さまざまなライフスタイルに対応した暮らしができます。



キーワード	● 生活圏の形成	● 安全・安心
	● レジリエンス	● 事前復興
	● デジタル技術の活用	● リノベーション
	● カーボンニュートラル	

イメージ5 多様な交通手段によるネットワークがあり、地域内外を便利に移動できる

- ・居住地域では、公共交通網により、居住地域内を移動することができ、大阪や京都へも便利に移動できます。
- ・北部地域では、地域主体の交通手段の導入が進み、公共交通との連携により、移動手段が確保されています。



キーワード	● 交通環境の維持	● M a a s（マース）
	● シェアモビリティ・ライドシェア	
	● モビリティマネジメント	● 自転車の利活用

イメージ6 多様な人とのつながりがあり、多様なコミュニティが育まれている

- ・地域住民が地域のコミュニティ活動やまちづくり活動に主体的に関わりを持ち、人とのつながりや連携が大切にされ、まちへの愛着につながっています。
- ・大学や事業者などの多様な主体がまちづくりに関わり、地域住民と共に、より良い地域づくりが進められています。



キーワード	● 地域住民と育む	● まちづくり組織
	● ひと・プロセス重視	● 大学生が多い
	● 大学との連携	● 事業者との連携
	● 地域貢献	● エリアマネジメント
	● 文化芸術のまちづくり	● 担い手の発掘・育成
	● 地域防災力	● 自助・共助・公助
	● コミュニティ醸成	● ソーシャル・キャピタル